



今年こそ“遊”に期待します！

2014年、明けましておめでとうございます。今年もよろしく願い致します。

さて、毎年のことながらこの原稿を書いているのは、まだ2013年の12月中旬。つい先日、2013年を表す漢字に「輪」が決定した、というニュースが流れたばかりです。この文字は、やはり「2020年東京五輪開催決定」が大きく影響していることは明らかですが、その立役者の一人であった猪瀬東京都知事が就任一年で辞任するという、予期せぬ展開もありました。

昨年はまた、東京五輪開催決定に関して一気に活気づいたのが、「カジノ誘致」でした。既にIR議員連盟による法案も提出されており、今年はずその動きが注目されます。いくつかの遊技関連企業もカジノ関連への投資を行っているだけに、勢力図を含めた影響は少なくないでしょう。さらにそうした法整備が推進されることによって、パチンコ業界でもうっすらと形づいて来た「ECO遊技機」の採用が進むのではないかと…といった声も聞こえて来るなど、内外に渡って大きな変革を予感させるような動きが見られたように思います。

そんな中、2014年の遊技業界に期待したいことを一文字で表すとすれば…それは、やはり「遊」しかないと思います。昨年はアムテックスの『CRAトキオデラックス』などリメイク機種が牽引役となり、「羽根物ブーム」が巻き起こりました。また12月には、パチンコメーカーで「向こう一年間は、遊パチタイプしか作らない」と宣言するところが出て来るなど、遊べるパチンコに対するニーズや重要性は、ますます増えていると感ぜられる出来事が相次いでいます。今普通に使われている「遊パチ」という言葉（ジャンル）が、一般からの応募により決定したのは2006年10月。しかし誕生以降、初当り確率が

おおむね200分の1以内程度として、「遊パチマーク」をくっつけてデビューする機種は多数あっても、実際に打ってみると初当りは甘くても出玉がほとんどなかったり、確変への振り分けや出玉に偏りが大きかったりして、「これ、本当に遊パチなの？」と疑わしく思えるものも、少なくなかったのが現実です。遊びやすいはずなのに、ややこしい仕掛けがあっては本末転倒というものです。一方、羽根物タイプは日遊協をはじめとする業界団体でも昨年夏頃から、それを軸にファンの掘り起こしを目指そうとする動きを見せていました。今年4月には、羽根物タイプを中心とした「遊べるフェスタ」を再び開催する計画が進んでいるとのこと。2013年は一般向けのイベントが少なかつただけに、こうした流れはぜひ止めることなく続けていってほしいと思います。

2014年は、もう一つ大きな懸念材料として「消費税アップ」もあります。遊びに使えるお金がますます減っていく中、ファンにとって今までのように「大きくかけて大きく取る」というスタイルは、続けていくのが難しいと思われます。やはりまずは、手軽な楽しさを知ってもらうこと、そのための「遊」という意識が重要になっていくでしょう。

「遊パチ」という言葉はいつの間にか誕生から7年を越え、人間で言えば小学生になりました。これから思春期や独り立ちの時期を迎えるにあたり、今年は画一的な枠組みを外して、育てていく方向性を考え直してみてもいいのではないのでしょうか。



2006年10月、「手軽に安く遊べるパチンコ・パチスロ展示会」の会場（池袋・サンシャインシティ）で、愛称「遊パチ」が発表された